

machi-no
ne

まちのね

issue 2
winter, 2025



レヅジョ・エミリア・アプローチ
ボーダークロッシングス展によせて
デジタルツールとの出会いでひろがる可能性

こえをきく

こどもたちの学びの物語り

生きている
—— 綿の探究から
まちの保育園 吉祥寺

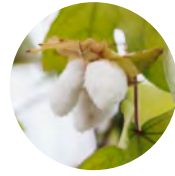
綿に包まれたタネを植え、毎日水やりをして大切に大切に育てていく中で、こどもたちはコットンに愛着を持ち、いろんな発見をしています。4歳の子どもたちの、コットンとの関わり、長い期間のほんの一部ではありますが、こどもたちの「こえ」をご紹介します。

武蔵野台地の自然に囲まれた、まちの保育園 吉祥寺。開園当初より地域の方々との堆肥づくりや、むさしのエコリゾート（武蔵野市の環境啓発施設）とのコラボレーションなど、地球の環境との共存と循環を大切にしている取り組みが行われてきました。

吉祥寺園には、グリーンアトリエと呼ばれる場所があります。造園園芸の専門家でもある元保護者の方を交えて構想を重ね、「循環」「つながり」「美しさ」の3つを構成要素として、豊かな実体験とじっくりと探究するプロセスを大切に保育をしていく起点となる場所です。0歳から武蔵野の豊かな自然と関わり、五感をフルに使い、表現していく子どもと大人を目指しています。

昨年、開園10周年を迎え、あらためて園で大切にしていきたいことを職員間や保護者と対話していくなかで、コットン（綿）を育ててみるのはどうか？と提案がありました。アトリエの理念と、「循環」「つむぐ」「地域とつながる」の想いが重なり、タネからみんなで育てることにしました。

現在、日本ではコットンの生産量が著しく落ち、ほぼ輸入に頼っている状況です。見た目も愛らしく不思議なコットンと子どもたちが関わっていくなかで、グリーンアトリエの思考のプロセスも歩めるのではと考えました。



わたのたね と じぶん

たねになりきる



「たねはどうやっておおきくなったのかな？」

小さなたねがこんなにも大きく成長する。その事実を、クラスの子どもたちはどんなふうに感じているのだろうか？

「たね」と「じぶん」を比べながら。足は生えるのかな？ 歩けるようになるの？ 人間は歩けるのに、わたしは歩かないの？ 多くの不思議が出てきたようでした。

どうやっておおきくなったんだろう？ みんなもたねになってやってみない？

みんなでうえたから、みんなでおおきくなった！



「たねは土の中でひとりぼっちだったのかな？」
「みんなでうえたから、みんなでおおきくなった！」

からだを小さく丸めて、たねになりきるみんな。

最初はエネルギーいっぱいじゃぶをして、成長を表現していました。

土の中は音がするのかな？
どのくらい土の中にいたんだろう？

問いかけていくと、よく考えてから、それぞれ表現を始まりました。



ゆっくり両手を広げて、真剣な眼差しで表現していくMさん。



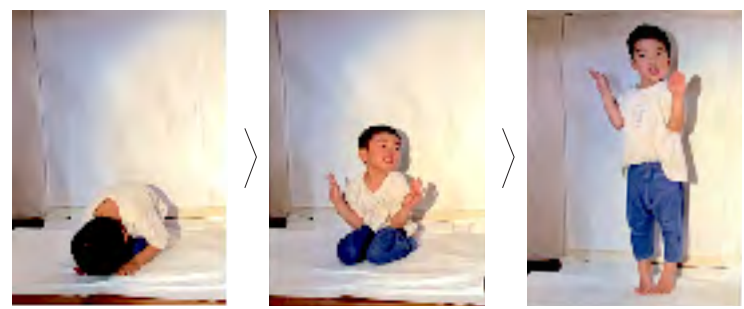
葉っぱがゆらゆら揺れると、いろいろなところでお花が咲き始めます。



じっと手元を見つめて、指をひとつずつ折たたんでいきます。その様子はまるで、花が実に変化してゆく過程そのもの。



その手を下に向けて開くと、見事に綿が出来上がりました。



土の中で、そのときをじっと待つ「たね」。



大きく両手を広げて葉っぱが大きくなっているようです。



しばらくすると、びよこつと小さな新芽が生まれた。



ふと、手元を見つめ手のひらを上向きに。



つま先をぐっと伸ばして茎が成長しているよう。



そして大きな声で「もっと、おおきくなるよ」

わたの一生

1 生まれる気持ち

2 もっともつと大きく

3 花が咲き、わたとなる

4 わたが朽ちるまで

*動画は閲覧専用です。画面収録やスクリーンショットはお控えください。

保育者のこえ

じっくりたねからの成長を考えてみる。身体で表現してくと、そのゆっくりとした時間の経過やエネルギーの溢れるような俊敏な動きひとつひとつに生きる力を感じます。Mさんの指先の細かい動きから、花からわたの実になる過程の神秘さを感じます。両手を伸ばして、「もっと、おおきくなるよ」というAさんの言葉からきっとAさんの想像の中でうんと葉っぱが育ち伸びているんだと強く思います。動画4「わたが朽ちるまで」では、くねくねと体を動かしながら生き生きと成長し、最後はゆっくりと朽ちていくストーリーを表現している姿がありました。

葉っぱを観察する

ひとつの気づきから生まれる探究



ある日のこと
“わたの葉っぱのカタチ”と、
“自分の手のカタチ”が似ていることに
Nさんが気がつきました。

夢中になって
「おおきなまちみたい」とAさん。
「なんかさ、これちずみたいだね」とJさん。

葉っぱの中にまちがあるなんて、
なんて素敵な発見だろう。

よくみて、さわって、
「葉っぱの絵を描いてみない？」と提案してみました。



「ほんとうのちずみたい。あかいところ、
なんだろう？ けっかん(血管)かな？」

「こんなかたち。こういうせんが
あつてつながってる」

「くろいてんもきれい。
おおきなまると、ちっちゃいまる なんだろう？」

「あかいみち(葉脈)にしんかんせんがとおってそう」

これって、けっかんかな？ いきものってちがあるもん。なんで、みずがちになるんだろう？



Kさんは、葉っぱのカタチではなく、葉脈の線を繋いで描いていきます。よくみると葉っぱに黒い点々があることに気がつき、葉脈とのつながりを丁寧に描いています。

そして、仮説を立てていきます。
どこから水を吸うのか。どうして血がここに流れているのか。

わたの蕾の中に水がたくさん入っていて、
「みずがわたになるんじゃない？」
「なんで、みずがちになるんだろう？」

この言葉だけを聞くと、すこし唐突な発想のように思うかもしれませんが。しかし、Kさんと共に経験を重ねている保育者にとってはひとつひとつ、彼が経験をともに仮説を立て、めいめい深い思考を耕しているように感じられます。



「わたしのてにも、おなじがあるよ」と
手や手首を見ながら、血管を指差すRさん。

「え？ はっぱにち(血)ってあるの？
え？ いぬとかもち(血)はないよね？ なんてはっぱにあるの？」

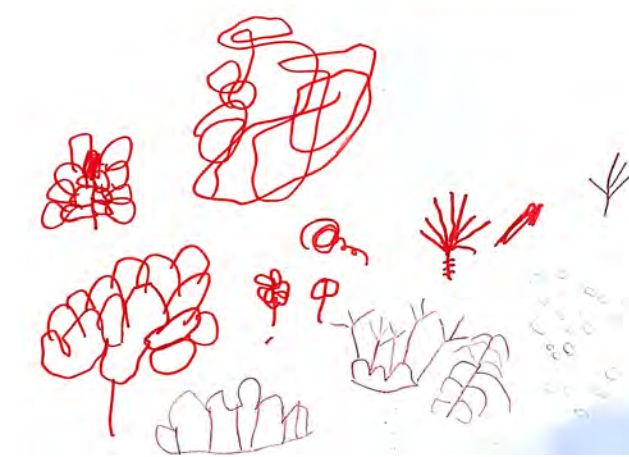
不思議に思いながらよく見て描く葉っぱの絵は、
葉っぱのかたちではなく、
葉脈など葉っぱに描かれている模様や組織、
そのものでした。



Eさんも、さまざまなパーツを描いていました。

マイクロスコープ(デジタル顕微鏡)を使いながら
丁寧に横から見た断面や、葉脈のつながり。
そして葉脈や組織の不思議なかたち。

なんとも科学的で、
さまざまな方向から感じとった葉っぱでした。



保育者のこえ

「葉っぱを描いてみる」という行為に、
こんなにも多様な視点があるとは思いませんでした。

小さな葉っぱが、大きなまちに、
そして地図へと広がってゆく想像力の豊かさ。

さらに、「手の形と似ている」ことから出発した思考は、
赤い葉脈と血管が似ていることへの発見につながり、

葉っぱ、人間、動物の体内の仕組みを不思議に思い、
困惑しながらも仮説を立て、対話する姿が印象的でした。



ボーダークロッシングス

— 行き来する、その先へ —

子どもと自然とデジタル

1月18日より、レッジョ・エミリア・アプローチの「子どもと自然とデジタルの出会い」をテーマとした国際展覧会が東京を皮切りにスタートしました。

北イタリア発祥の創造的な思考を育む教育、「レッジョ・エミリア・アプローチ」。

1990年代、アメリカ版ニューズウィーク誌に「世界で最も先進的な幼児教育」として取り上げられたことを発端に高く評価され、OECD（経済協力開発機構）が参考にすべき事例に取り上げるなど、近年より一層の注目を集めています。

今回の展覧会では、豊富なパネル展示や映像資料に加え、体験型のアトリエが併設されていることが特徴です。会期初日には関連イベントとして、イタリア本国の教育者を招いてのワークショップやシンポジウムが開催されました。また、2月には表現者とのトークイベントも予定されています。

トークゲスト：2/7(金) tupera tuperaさん（クリエイティブユニット）
 （出演日程順）2/8(土) 片岡千之助さん（歌舞伎役者・俳優）
 2/11(火祝) 津川恵理さん（建築家） *時間は全て18:30~20:00

本展はこれまでにイタリア本国での展示のほか、2012年のニューヨーク近代美術館（MoMA）での公開をはじめ、世界7カ国19の都市で巡回展が開催され、日本では今回が初公開となります。東京会期を皮切りに、石川県加賀市、長野県軽井沢町での巡回が決定しており、今後も巡回会場は拡大を予定しています。

現代の子どもたちはデジタルネイティブとも呼ばれ、生まれたときからさまざまなデジタル機器に囲まれて育ちます。一方、日本の保育・教育現場でのデジタルの活用は少しずつ広がっているものの、子どもたちの「表現のツール」としてのデジタルの可能性に着目した事例は未だ少ない状況です。

レッジョ・エミリアでは1980年代から、当時最先端だったパーソナルコンピュータを含むデジタル機器を保育・教育に取り入れており、今日に至るまで、子どもたちがデジタル機器を自らの想像力を膨らませ、思いや考えを表現するためのツールとして日常的に取り入れた豊かな教育環境づくりと実践が行われています。

本展では、現地の乳児保育園、幼児学校で、子どもたちがデジタルをツールとして活用しながら自分たちと自然の関係性について探究した「物語り」をご紹介します。

子どもたちの創造的な学びのプロセスを通じて生まれる「デジタル詩」（子どもたちの表現、100の言葉）を、ぜひお楽しみください。

オープニングシンポジウムより （JIREA及びまちの保育園・こども園代表の松本よりお話しさせていただいた内容を抜粋）

この展覧会は子どもの文脈のみならず、アートの文脈でも関心を持たれてきたものでもあります。今回来日くださったベダゴジスタのMaddalena Tedeschiさん、アトリエリスタのMarco Spaggiariさんには展覧会の全体監修をいただきましたが、どこの都市でも全く違うアトリエ、構成であったとお話されていました。レッジョ・エミリアでの実践や体験をそのまま届けるのではなく、各都市の文脈や文化との対話から、その都市ならではのアトリエを構成・展覧会を構成していきたいという考え方を持たれているとのことでした。

この展覧会は「自然とデジタル」という、一見矛盾するような思想を行き来しながら、そこで子どもたちが持っている豊かな創造性や思考、ものの見方に迫っていく。新しいものの見方を見出ししていくという企画ですが、私たちとしては、ポイントとしては3点あると考えています。

- 子どもたちによってひらかれるデジタルの可能性**
 レッジョ・エミリアの子どもの実践の中に、デジタルとアナログの環境を世界を行き来しながら、生き物の世界をつつていた物語がありました。子どもたちとデジタルの関係性が、「何かを処理する・問いを解く」ためにあるというだけではなく、「問いを広げる」対象として、向き合っていることが面白いと感じています。
- 子どもたちの豊かさ**
 子どもたちの発想、表現、ことばの豊かさにも着目したいと思います。例えば、デイジーの花をマイクログラフで見ていることで、また違うものの見方があります。そこから広がる子どもたちのイマジネーションには、大変魅了されるものがあります。子どもたちが投げかけてくれる姿の豊かさを、より一層、みなさんと確認していきたいと思っています。
- 自然とデジタルの境界を行ったり来たりすることから、新しく見えてくる考え方、感じ方があるということ**
 デジタルと自然の境界を行ったり来たりしながら、子どもたちがどうそれをつなげていくか。美しさという軸でつなげていたり、生きるという軸でつなげていたり。子どもたちのこういった発想から、大人も新しい考え方を持つことができる機会につながっていくと考えています。

今、こどもまんなか社会の実現や、子どもたち一人一人の声を聞きながら保育・教育を組み立てていくという取り組みが国をあげて進められています。そのときに私たちは、子どもたちの持つ豊かな姿をいかに読み取り、共有するかということが大事であると感じています。この展覧会が皆様の対話のきっかけの一助を担っていくことを願っています。

まちの保育園・こども園と、レッジョ・エミリア・アプローチ

レッジョ・エミリア・アプローチ。特徴は様々ありますが、私たちは「共同性」と「創造性」であると認識しています。

「共同性」とは、シンプルに言えば、コミュニティの「参加」と理解していいでしょう。レッジョでは、「教育はすべての子どもの権利であり、コミュニティの責任である」と定義されており、専門的に様々な理論や教育思想を土台にしながらも、コミュニティの中で子ども自らが主体的に学ぶ、豊かな保育がなされています。大事にしているのは「市民」としての子どもの参加です。子どもの意思・考え・アイデアが、いつも尊重されています。

次に、「創造性」。レッジョ・エミリア・アプローチの保育環境や子どもたちの姿は、創造的で美しく、保育・教育関係者のみならず、まちづくりの観点からも、魅了される人は後を絶ちません。

伝統的な教育に対する痛烈な批判を詩に綴ったレッジョ・エミリア・アプローチの『子どもたちの100の言葉』は、大きな反響とともに、世界中に広がりました。

まちの保育園・こども園は「まちの保育園の保育」を実践しています。しかし、こども観やコミュニティ観においてはレッジョ・エミリア・アプローチと共通の理念を持っていると感じています。同アプローチにおいて「こどもとは、その可能性において豊かであり、有能で、力強く、大人や他の子どもたちとの結びつきの中で生きる存在」とされています。ここが、私たちが深く共感しているところです。

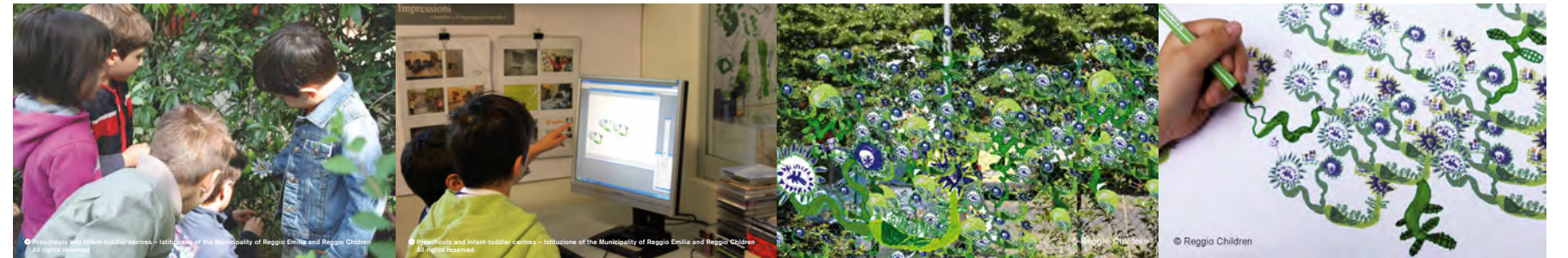
まちの保育園でも、そういったこども観を皆で共有し、一層豊かなものとして育んでいきたい。このような思いからレッジョ・チルドレンの主催する国際ネットワークに加入し長きに渡り学びを重ねてきました。

2018年にはJIREA (Japan Institute for Reggio Emilia Alliance) という団体を設立。日本の窓口として、展覧会・シンポジウム、研修ツアーの企画、書籍の出版・翻訳等を行うほか、加入している各国と学び合っています。

子どもたちの100の言葉
 子どもは100をもって生まれてくるが、学校の文化はそのうち、99を奪う。学校の文化は100のものはないと子どもに教えるが、子どもたちはこう言う。
 『冗談じゃない。100のものはここにあり』と

本展の見どころ

1 豊かな保育実践を豊富な写真・動画資料とともに紹介 / 現地の保育現場から生まれたワーキングノートブックの公開



事例) プルノ・ムナリー幼児学校の探究の物語り「植物効果：花にはじまり、植物の新しいプロジェクトへ」：園庭に咲くバッションフラワーを発見し、その美しい姿に心惹かれ、よく観察し、描写することから始める子どもたち。デジタルツールが保育環境の中で提案されることで、成長する植物の表現は、絵画からデジタルへ、またその逆へと、のびのびと自由に行き来し、自然と表現をつないだ一種のインスタレーション作品へと発展していきます。

2 大人も子どもも五感を解放して、新たな問いと出会うアトリエ環境

新しいアイデアを生み出し、創造性を刺激する、アナログ/デジタルツール、多様な素材との「出会いと対話」の場所としてデザインされたアトリエを再現。自然物のデジタルランドスケープからインスパイアされ、つづきを創造する“描く”空間、3次元デジタル空間の中で、実感覚とバーチャル感覚の間に生まれる新たな関係性を探索できる空間など、「自然とデジタル」をテーマに、私たちの感性にはたらかせるアトリエの環境を体験いただけます。



会期・会場

1/18(土) — 2/1(土) 東京・九段下 イタリア文化会館 平日 10:30 - 17:30 (最終入場 17:00) 土曜 12:30 - 19:30 (最終入場 19:00) *日曜閉室 入場料：無料 共催：イタリア文化会館	2/7(金) — 2/12(水) 東京・南青山 ポーラ青山ビルディング 地下1階 P.O 南青山ホール 2/7(金) - 9(日), 11(火祝) 9:30 - 17:30 (最終入場 17:00) 2/10(月)*, 12(水) 10:00 - 19:00 (最終入場 18:30) *2/10(月)はChildren's / Student DAYとして完全予約制を予定 入場料：一般 1,000円 / 中学生・高校生 500円 小学生・未就学児 無料 協力：株式会社ビーオーリアルエステート	3/1(土) — 3/9(日) 石川・加賀市 山代スマートパーク 平日 10:00 - 18:00 (最終入場 17:30) 土曜・日曜 10:00 - 16:30 (最終入場 16:00) 資料代：一般 500円 小学生・未就学児 無料 共催：加賀市	3/18(火) — 4/1(火) 長野・軽井沢 EtonHouse International School Karuizawa 月一日 9:30 - 16:30 (最終入場 16:00) 入場料：一般 1,000円 / 中学生・高校生 500円 小学生・未就学児 無料 共催：EtonHouse International School Karuizawa
---	---	--	---



<h2>今と未来を 考える</h2> <p>保育・教育をめぐる 社会のあれこれ</p>	<p>②</p> <h2>赤ちゃん学</h2> <p>～乳幼児との関わり方、非認知能力の伸ばし方～</p>	<p>科学的な目で赤ちゃんを観察し、発達のおしくみを解明し、育児や保育の現場に活かす「赤ちゃん学」。そんな赤ちゃん学の世界から、日常の関わりの中でできること、発達や学びのメカニズム、子育ての心構えについてお伺いしました。</p> <p>お話／遠藤利彦 先生 <small>東京大学大学院教育学研究科教授・同附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）センター長</small></p>
---	---	--

<h2>まちのねのね</h2> <p>まちのチームの読む辞典</p>	<p>ぶん え</p> <p>まちの保育園・こども園 まちの研究所 代表 松本理寿輝</p>	<p>私たちの園や様々な場で、大切にされていることや文化、頻出する言葉たちを、辞典形式でお届けするコーナー。気になったところから、つまみ読みしていただきたい「読む辞典」として、私たちの周りに「ねっこ」としてある言葉たちをご紹介します。今回は、【く】からスタート。</p>
------------------------------------	--	---

赤ちゃん学の概要と、研究の広がり

私自身は発達心理学が専門で、主に子どもの心と行動の発達を研究しているのですが、「赤ちゃん学」は医師、脳科学者、ロボット研究者など様々な分野の専門家が赤ちゃんの成長を多角的に研究する学問です。

この学問分野は1980年代頃から急速に発展し、赤ちゃんが単に未熟な存在ではなく、驚くほど多くの能力や心の力を“生まれながらに”持つことが明らかになってきました。

例えば、視線や心拍の変化から赤ちゃんの興味や驚きが計測されたり、物事の区別や数の概念といった、基本的な理解力が非常に早い段階で備わっていることなどが実験で確認されています。

乳幼児期に土台をつくる「非認知能力」

最近、「非認知能力」という言葉をよく耳にしませんか？世界的にも注目されているこの能力は、知能指数や学力といった認知的な力ではなく、面白いことだったら夢中になって、もってやってみたいという好奇心、やる気。そして自分はやればできるんだ、というような感覚のことで。また非認知能力には、自己をコントロールし、他者と良好な関係を築く力や、他者と良好な関係を築くためのコミュニケーション能力や共感性、ルールやモラルを理解する力も含まれます。

言葉で教えたり指示するのではなく、あくまで「日常的な交流の中で体験を通じて学ぶ」ということが、非認知能力を伸ばすためには重要です。自己を大切に、前向きに自己改善を目指す力は、乳幼児期の大人との共感的なやり取りの中で土台が作られます。例えば、赤ちゃんが泣いた時や喜んでいるとき、その感情に大人が寄り添うことで「自分は理解され、守られる存在だ」という安心感も大切になってきます。

赤ちゃんが未熟に生まれる理由と成長の基盤としての愛着

人間の赤ちゃんは、ほかの動物と比べて未熟な状態で生まれてきます。これは、二足歩行である人間の骨盤の構造上、母親の産道が狭くなっており、大きくなりすぎると赤ちゃんが通れなくなってしまうためと言われています。

そのため、赤ちゃんの成長には親や周囲の人の細やかな愛情とケアが不可欠です。

これが赤ちゃんの心の安定と発達における重要な基盤となります。泣くことで助けを求める赤ちゃんに対し、大人が抱っこしたり対応したりすることで、“自分はいつだって無条件に受け入れられる”という体験をします。

その体験の蓄積が、「自分には愛される価値がある」「人は信頼できる」という感覚（アタッチメント=愛着関係）を育みます。

この愛着形成こそが、自己肯定感と対人信頼の基盤であり、反対に、無視や虐待を経験した場合は他者への不信感を抱きやすくなるとされています。

こうした経験は、大人になってからの人間関係にも影響を及ぼすとされているため、将来のコミュニケーション能力や他者への思いやり、健全な社会性を育むためにも、幼少期の環境は非常に重要とされています。

非認知能力が認知能力や学力にも影響を与える

非認知能力を乳幼児期にしっかりと育んだ子どもは、のちに自ら努力して認知的能力を高める傾向があることが研究で示されています。

つまり、自分のことを大切に思い、物事に挑戦し続ける意欲が、将来的な学力向上にも寄与するということです。かつては、早期からの知育教育が重視されていましたが、現在では「まず非認知能力を育む」ことが、長期的な成長や幸せにとって重要と考えられています。

「ほどほどの関係」が子どもの自立心を育む

子どもと親は「ほどほどの関係」が健全な発達を最も支える、なんて言われることがあります。これは、親が常に完璧な対応を目指すのではなく、自然体で、肩の力を抜いて子どもに接していいんだよ、ということです。

日頃、家事や仕事に追われるなかで、抱っこや声かけなど、すぐには対応できないこともあると思います。でもそんなとき、子どもは自らの力で状況に対処する術を見つけ出そうとします。このように、ときにはフラストレーションやストレスを経験することで、自分自身で問題を解決しようとする力、自立心を養うことに役立ちます。

過度に手助けをしすぎて、子どもが困難に立ち向かう機会を減らしてしまうよりも、完璧ではない関係のほうが、心のたくましさにもつながるはずです。

しかしどうしても罪悪感を覚えるかもしれません。そんなときは、「今日は急いでいて応えてあげられなかったね」とちょっとだけ反省したり伝えたりして、また子どもにも向き合う機会をつくる、ということでも十分だと思えます。

赤ちゃんの感情に共感し、心の育ちをサポートする

先ほども申し上げたとおり、赤ちゃん(子ども)が感情の変化を示した際には、近くにいる大人がその気持ちに共感し、適切に反応することが心の発達に役立つとされています。赤ちゃんが痛そうな顔をした時、つられて親も痛そうな表情をすれば、自分の感情が理解されたと感じることができる。

赤ちゃんが泣いて何かを求めているときや、赤ちゃんに接するとき、大人は自然と「気持ち悪かったね」「すっきりしたね」なんて言っていると思いますが、そのように心の状態を大人が映し出してあげることや、“ああ、いま自分はそんな気持ちだったんだ” などの理解できるようにすることができます。

何気ない日常のやりとりのなかで、感情の意味を学び、自分の心の状態を把握する力を育む。こうした小さな共感と受容の積み重ねが、赤ちゃんの情緒的発達において非常に重要です。

子育ては、子どもと親の「個性」に合わせて十人十色

今はインターネットの情報も溢れていて、ついに人と比べてしまったり、理想にとらわれてしまいがちですが、誰がやっても、誰にやっても、うまくいくただ一つの方法なんて、ないと思いませんか？

親と子の個性、得意不得意、その組み合わせに応じて、それぞれの形を模索していく。“私の強み”をいちばん活かせる、あるいはこの子のいいところ・強みを引き出せる、そんな関わり方こそ理想かもしれません。

なるべく楽に、たのしい気持ちでやりとりができると、お子さんも自然とたのしい気持ちになっているかもしれません。

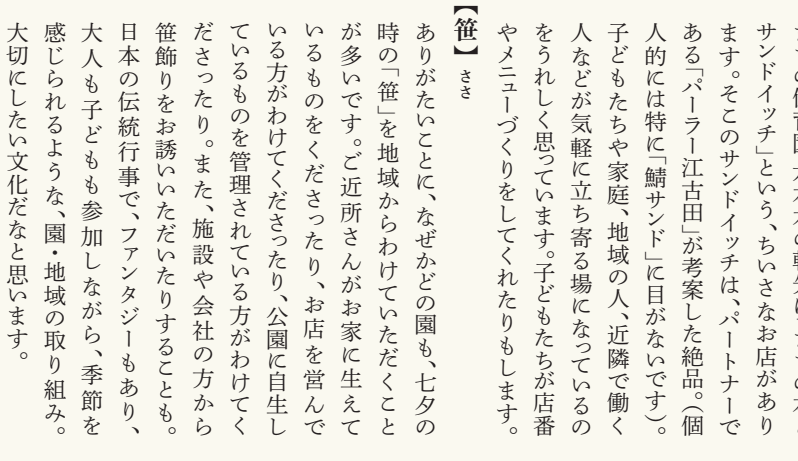
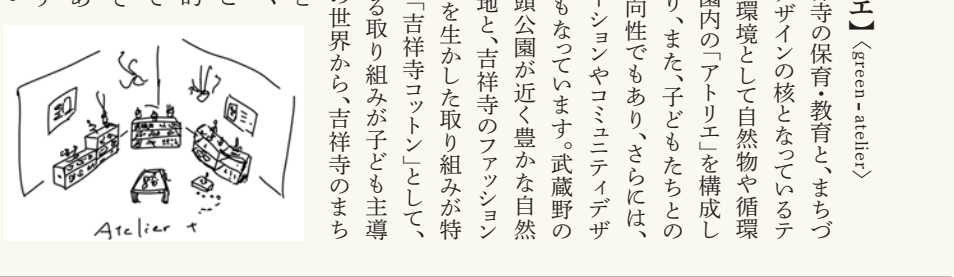
乳幼児の成長には個人差があります。他の子、他の家庭と比較するのではなく、目の前の子ども自身が昨日より少しでも成長した点に注目し、そっと見守る姿勢でいられるといいですね。

【研究】けんきゅう

私たちの組織は「子どもたちのための3つの領域の循環からデザインされています。それは「実践」「共創」「研究」です。まず「実践」する場があり、そこが自分たちのいろいろな創造の中心となっています。日々、子どもたち・家庭・地域と共にあるのが私たちの仕事の真ん中です。次に、そこで自分たちなりに経験したことを活かして、社会のあらゆる主体(自治体や企業・研究機関・アーティストなど)と共に子どもたちの環境をつくって

【研究】けんきゅう

私たちの組織は「子どもたちのための3つの領域の循環からデザインされています。それは「実践」「共創」「研究」です。まず「実践」する場があり、そこが自分たちのいろいろな創造の中心となっています。日々、子どもたち・家庭・地域と共にあるのが私たちの仕事の真ん中です。次に、そこで自分たちなりに経験したことを活かして、社会のあらゆる主体(自治体や企業・研究機関・アーティストなど)と共に子どもたちの環境をつくって



【コミュニティコーディネーター】

まちの保育園から生まれた役割職種です。長いので「しーしー」とも言われています。いまこのCCは、園・学校・自治体など様々なところに広がってきています。私たちは子どもの育ち、学びをまちづくりの担い手として、園や学校がまちづくりの担い手として、地域・コミュニティのウェルビーイングを進めていくことを大切にしています。そのとき、コミュニティデザインの中心的な役割を担っているのがこのコミュニティコーディネーターです。大きくみると、子どもとの興味とまちの人や場をつなげたり、大人の興味だつてつなげてみたり、家庭同士や地域の誰かの想いを何かにつなげたりしているのですが、日常的には、園・施設に常駐していて、家具を直したり、園庭の手入れをしたり、事務をさせていただき、誰かと一緒に子どもやコミュニティ、地域のための企画を立てているなど、何でも屋さんのに動いています。何かあったら、まのCCのように気軽に頼れる存在になっっています。

【サンドイッチ】< sandwich >

まちの保育園 六本木の軒先「まちの本とサンドイッチ」という、ちいさなお店があります。そのサンドイッチは、パートナーである「パーラー江古田」が考案した絶品。個人的には特に「鯖サンド」に目がありません。子どもたちや家庭、地域の人、近隣で働く人などが気軽に立ち寄る場になっているのをうれしく思っています。子どもたちが店番やメニューづくりをしてくれたりもします。

【Coしばや】< cshiba >

まちの保育園・こども園で地域の家庭と出会いながら、子育て環境について私たちがなりにできることをして行きたいと思ひ、「Coしばや」をつくってみました。渋谷区子育てネウボラの一環として生まれた、子育て支援センターです。子育ての相談の場でもあり、子どもと気軽に遊びに来られる場所でもあり、ちいさな講座やイベントも企画してたり、「Coの食事しよたいなく」という、ゆっくり食事したりカフェ的に過ごしていただける場もあります。

【時間の考え方】< jikan no kangaefata >

私たちが子どもに流れている時間を、子ども時間と呼び、大切にしています。そこには、いくつかのわけがあります。●「一目は、子どもが自分自身に耳を傾ける時間を持つことを大切にしたいからです。子どもは自己のために、自分の経験と照らし合わせるながら解釈しようとしています。例えば、水族館でイワシが群れる様子を見たとき、「迷子にならないようにだよ」といった自分なりの仮説を語ることがあります。大人が知識で瞬時に処理することもあり、子どもにとっては深い思考の対象となっていました。●「二目は、子どもの学びや育ちが常に「感情」に結びついていくことです。だからこそ、子どもはあらゆるものを無名性から引き出し、名前を持つ存在として位置づけるようになります。例えば、たんぽぽに独自の名前をつけたら、その家族や友達を想像してストーリーをつくりたいです。そこには、私たちが異なる時間が流れているように感じられます。●「三目は、子どもがプロセスを楽しむ存在であることです。例えば、絵の具の色を混ぜる探究している時、結果よりも変化そのものを楽しみます。大人が美しい状態を保とうとしがちなかで、子どもは好奇心に動かされ、過程の探査を観察し続けています。●四目は、答えを探しても、子どもは問いを立てることに慣れるようだからです。子どもたちは私たちがよりも「不確かさの感覚の中に生きていくように見えます。日々、未知に出会っているとも考えられます。確かに、世の中は不思議なことがばかっています。例えば、「色」と「広がり」の関係性について考えます。ある思考実験があります。心の中で、何色でもいので、色を思い浮かべてください。その色の面積がどんな小さくなって目に見えなくなりました。さて、そこには色はありますか？ここに、色と面積の法則には密接な関係があることを私たちは「直観」できました。ですが、これは科学的には説明できません。このことは科学的には説明できません。ですが、これは、いわゆる「現象学」という領域で言われていることなんです。私たちが人間は、こうしたことを経験によって「身体知化」しているといえます。それは幼い頃から、あらゆる不思議に、全身で出会う、身体が理解できるように変わっているようなのです。

【卒園児】< sotsugenkai >

卒園児との交流は私たちの大きな楽しみの一つでもあります。まちの本とサンドイッチや、私たちのカフェなどには卒園児は日常的に顔を出してくれたり、夏休みに園のボラテイアに来てくれたり、園のイベントの企画を立ててくれたり、卒園児は本当に頼もしいです。【そのようにみてくれる人がいる子ども】私たちが共に学んでいるレジャ〖・エミリアの人が「可能性豊かで有能な学び手としての子ども」とは聞かれた時に「それは、このようにみてくれる人がいる子ども」のことだ」と言いました。本当にそうだなと思ひ、大切にしています。

【セソップワンダー】< sesoppwonder >

世界に出会う(出会い直す)おもしろさ。子どもも大人も大事にしたい感覚です。【世界は自分たちで変えていけるという感覚】子どもたちが主体的に世界に関わることを私たちが応援しています。自分たちのアイディアを考え、創意工夫しながら失敗も繰り返しながら、全身で世界と関わら続けたい子どもたちはその感覚を持つべくように感じています。クリエイティブコンフィデンス(自分は何かを生み出すことができる自信・確信)とも関係していると言えらるかもしれません。

松本さんに聞いてみました

Q.好きな冬の過ごし方は？
A.お風呂でゆっくり温まる。

Q.好きなお味噌汁の具は？
A.豆腐。わかめも嬉しい。長崎の味噌噌を使うのがこだわりです。

Q.寒がり？暑がり？
A.寒がりです。

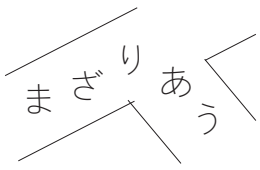
※吹き出し：松本さんをよく知る職員のおさん・Mさん

松本さんに聞いてみました

Q.寒がり？暑がり？
A.寒がりです。

※吹き出し：松本さんをよく知る職員のおさん・Mさん

共創プロジェクト

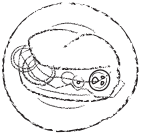


まちの研究所の

VOL.2

まちの本とサンドイッチ

「食は広く人をつなぎ、本は深く人をつなぐ」という言葉のもと、保育園と地域をつなぐ中間領域として、地域に根ざしたお店をめざし、2014年11月、まちの保育園 六本木(分園)の軒先にオープン。立ち上げ時から現在までお店に立ちつづけている、店長の原さんにお話を伺いました。



（ お店ができて丸10年。振り返ってみてどうですか？ ）

正直に言うと、最初は不安でした(笑)。今でこそ、麻布台ヒルズができたり、海外の観光客の方も多のですが、当時、周囲は完全に住宅街。人通りもまばらで、この場所で本当にやっていけるのだろうか……と。でも、地域に住む方が、マンションの住民同士で噂を広めてくれたり、近隣のオフィス内で徐々に口コミが広がったり。「最近、紙袋を持っている人を見かけるけど、みんなどこで買ってきているんだろう?」。「謎の茶色い紙袋のお店」と呼ばれていたらしいです(笑)。



その後、やっと軌道に乗ったと思ったら、今度はコロナ禍で街から人がいなくなってしまう。でもそんな時だからこそ、お店の存在意義を改めて感じ、開き続けることに使命感のような感覚もありました。多くの人に支えてもらって、ここまでやってこれたと本当に思います。

（ まちの本とサンドイッチで働くことになったきっかけは？ ）

もともと、子どもと関わることが好きで、キャリアのスタートは保育士でした。母が料理関係の仕事をしていたことも影響して、数年後、飲食業に転職。ハードに働いていましたが、自分が出産した年に東日本大震災を経験したことで、コミュニティの必要性を実感し、視点が変わりました。そのとき目にしたのが、まちの保育園の記事や、小竹向原園に併設するカフェ「まちのパーラー」の取り組みで、考え方に共感して。応募時はコミュニティコーディネーター志望だったのですが、さまざまなタイミングが重なり、(まちサンドの)店長としてお店の立ち上げから携わることになったんです。



（ 「まちサンド」ってどんな場所だと思いますか？ ）

園の子どもたち、保護者、職員はもちろん、地域に住む方、近隣のオフィスの方、みんなにとっての「あいだ」の場所というか。たとえば、園児にとっては保健室のような存在。朝、登園したものの、まだ遊ぶ気分になれない……そんな様子を見て、保育室とお店の間の廊下にそとイスを出しておくと、そこで一息ついている姿があったり。ふと見るともう部屋に戻っているんだけど、焼菓子やスープのいい匂いがして、私が料理している気配を背中であんな感じながら、気持ちを整理したり、スイッチを切り替えているのかな。保護者の方は、お迎え時、園に入る前にちょっと立ち寄って、コーヒーを飲みながらおしゃべりしたり。そのまま買ったパンを置いて帰っちゃうなんてこともあるあるです(笑)。仕事の方は、「ちょっと外の空気を吸いに」「甘いものでひと息つきたくて」という声も多いので、ほっとできて、コーヒーに合いそうなメニューを増やそうかな、とこちらも考えたりします。



（ このお店ならではのエピソードを教えてください。 ）

今は海外の大学に通っている、初年度の卒園生が、夏休みに帰国したタイミングでお店に来てくれて、まちサンドのスコーンが好きで、「原さんとお菓子を作って店番したい」と言ってくれて、一緒にお店に立ちました。六本木という国際色豊かな土地柄が、日本を離れる子も多いけど、帰国するとふと、お店を思い出してくれるみたいです。あるときは、小学生になった卒園生が、「通っていた保育園を描く」という学校の課題を見せに来てくれて、お店のことをたくさん描いていました。店員全員の名前まで(笑)。保育園という場所が、「お母さんお父さんがパンを買ってくれた」「友達と一緒にお菓子を食べた」そんな記憶と結びついているんですね。食を通じた幸せなひとときに貢献できているのかな、と思ったりもします。園の軒先に、昔と変わらない同じ店と同じ人が今も居るといえるのは、立ち寄りやすい理由のひとつになっているのかもしれない。



他にも、店先でのこども服交換会や、園のこどもたちにケーキ作りを教えたり、地域の方にレモネードのワークショップをしたり、お店の常連さんが園で保育体験(!)したりなど……挙げるとキリがないですね!



（ これから、どんな10年にしていきたいですか？ ）

coしぶや(渋谷区神南ニューボラ子育て支援センター:まちの研究所運営、2021年オープン)内のコミュニティカフェ「coの食卓」の店長も兼務しているのですが、こちらは野菜たっぷりの定食が食べられて、赤ちゃんの泣き声や子どものイヤイヤが当たり前の、人目を気にする必要がない「おたがいさま」の空間です。

まちサンドだったり、coの食卓みたいな、誰かがほっとできる場所だったり、子育て中に気軽に行けるようなお店が、日本中にもっと増えたら嬉しいなと思います。そうすれば子育てしやすくなるし、子育てがもっと楽しくなるかも。大人がご機嫌でいられることが、子どものしあわせに繋がるといつも感じています。大人たちの安心や余裕、ちょっとした喜びが、こども達にも伝染していきなあって。

個人的な目標としては、10年後もここにいたいから、身体のメンテナンスは欠かさずにはじめは自分ひとりのスタートでしたが、今では仲間がたくさんできました。これからも、共感してくれる人が集まってくれたら嬉しいし、続けるために、もっと広げてゆくに何ができるか考え続けたい。前向きに仕事ができるための環境づくりをしていきたいですね。

まちの本とサンドイッチ
月～金(土日祝休)
9:00～17:00
東京都港区虎ノ門5丁目5-1
アークヒルズ仙石山テラス1F
(「まちの保育園 六本木 分園」よこ)



INFORMATION

BOOKS 関連書籍/掲載情報



まちの保育園 南青山掲載



まちの保育園 小竹向原掲載



まちの保育園 小竹向原掲載



まちの保育園 吉祥寺 実践を掲載

出版記念イベント決定!
2/17(月) 19:00～
まちのこども園 代々木公園
(現地orオンラインライブ配信)



HP



note



HP



Instagram

EVENT イベントのお知らせ

ドキュメンテーションを持ち寄る対話の会

ドキュメンテーション等を持ち寄り(無くて可)、職員と共に対話をするイベントです。ご興味がある方ならどなたでもご参加いただけます。

2/18(火) 19:00-20:00

まちのこども園 代々木公園

3/26(水) 13:30-14:30

まちの保育園 小竹向原



一般の方向け 見学会

まちのこども園 代々木公園

2月下旬～3月上旬ごろを予定しております。採用へのご応募を検討中の方もお気軽にご参加ください。詳細決まり次第、HP、Instagram等にてお知らせいたします。

参考図書



監修: 秋田善代美、松本理寿輝
編著: 東京大学大学院教育学研究科附属発達教育実践政策学センター、まちの保育園・こども園

世田谷プロジェクト、はじまります



2025年春、世田谷区池尻で幼児～小学生を対象とした、まちの研究所の新プロジェクト「Question is_ (仮称)」が始まります。創造的な環境の中で、好きを起点に子どもたちが出会い、対話を通して自分なりの「問い」を見つけ、深めていく場。進捗や説明会情報等、まちの保育園・こども園Instagramや、まちの研究所HPでもご案内していきます。ぜひ楽しみにお待ちください!

あとがき

「まちのね」第二号、ここまでお読みいただきありがとうございました! 今回もふじに発行できたこと、ご協力いただいたみなさまに感謝いたします。次号以降は、まちの保育園・こども園、まちの研究所ではたらく「人」によりフォーカスした企画もできたらな、と画策中です。また、「まちのね」をうちに置いてもいいよ! という方がもしいらしたら、ぜひご連絡ください。寒い時期がもう少し続きそうですが、みなさまどうも暖かくして、心おだやかに過ごせますように。本年もどうぞよろしくお祈りいたします。



本誌に関するお問い合わせ: press@machihoiku.jp